

Dec. 15 2006

JEKS (The Japan Electronic Keyboard Society)

News Letter

No. 3

日本電子キーボード学会ニュースレター

～日本電子キーボード学会「第2回全国大会」レポート～

目 次

1. 第2回全国大会概要	2
2. あいさつ	3
3. 総 会	3
4. 基調講演 “電子キーボードの未来を考える” 和智正忠	4
5. 研究発表 - I	
Room - 1 M.L.教育に関するもの／田中英夫、小倉隆一郎、脇山 純	5
Room - 2 アンサンブルに関するもの／桑原 徹、阿方 俊、海津幸子・藤井祥子	6
Room - 3 創作、歴史・その他に関するもの／山咲史枝、福地奈津子、金銅英二	7
Room - 4 教育、創作に関するもの／初山正博、森松慶子、三宅康弘	8
研究発表 - II	
Room - 1 生涯教育に関するもの／影山建樹、小澤真弓、仁田悦朗	9
Room - 2 Musical／Opera に関するもの／川村敬一、赤松英彦、西山淑子	10
Room - 3 将来性に関するもの／野口剛夫、前田栄子	11
Room - 4 将来性、歴史・その他に関するもの／小熊達弥、安井正規、中島洋一	
6. デモンストレーション、懇親会	13
7. 正会員名簿および会員申込み	14
8. 選挙結果と幹事体制	15
9. 事務局からのお知らせ	16
・ 学会誌「電子キーボード音楽研究」No.2 投稿者募集	
・ 第3回全国大会研究発表者募集	
・ ホームページ「掲示板」開設	
10. 編集後記	16

日本電子キーボード学会 事務局

〒215-0004 神奈川県川崎市麻生区万福寺 1-16-6 昭和音楽芸術学院 阿方気付

Tel : 044-953-1230 Fax : 044-953-6580

E-mail : jeks@snow.ocn.ne.jp H.P. : <http://www18.ocn.ne.jp/~jeks/>

銀行口座: りそな銀行 新百合ヶ丘支店 普通預金 口座番号 1318267 「日本電子キーボード学会」

郵便振込: 口座番号 00250-0-129916 「日本電子キーボード学会」

第2回全国大会成功裡に終わる。

第2回全国大会は、下記大会概要に基づいて開催されました。ニュースレター第3号は、大会レポート特集号です。あいさつと基調講演は森松慶子編集委員、研究発表は各司会者に文責をお願いしました。

第2回全国大会概要

10:00	受 付 6号館(教育センター)ロビー			
10:30	あいさつ 6号館(大講義室) 高野紀子(国立音楽大学学長) 吉田泰輔(日本電子キーボード学会代表幹事)			
10:45	基調講演 6号館(大講義室) 「電子キーボードの未来を考える」 和智正忠(東京医科歯科大学大学院)			
11:15	総 会			
12:00	昼 食 1号館学生食堂			
	Rm-1 司会 仁田悦朗	Rm-2 司会 柴田 薫	Rm-3 司会 野口剛夫	Rm-4 司会 安藤恭子
13:00	A - ① 田中英夫	C - ① 海津幸子・藤井祥子	E - ① 山咲史枝	H - ① 初山正博
13:30	A - ② 小倉隆一郎	C - ② 阿方 俊	E - ② 福地奈津子	H - ② 森松慶子
14:00	A - ③ 脇山 純	C - ③ 桑原 厳	F - ① 金銅英二	E - ③ 三宅康弘
14:30	休 憩			
	Room - 1 司会 小倉隆一郎	Room - 2 司会 海津幸子	Room - 3 司会 柴田 薫	Room - 4 司会 森松慶子
15:00	B - ① 影山建樹	D - ① 川村敬一	G - ① 野口剛夫	F - ② 小熊達弥
15:30	B - ② 小沢真弓	D - ② 赤松英彦	G - ② 前田栄子	F - ③ 安井正規
16:00	B - ③ 仁田悦朗	D - ③ 西山淑子		G - ③ 中島洋一
16:30	休 憩			
17:00	電子キーボード・デモンストレーション 6号館AVセンタースタジオ 今井慎太郎(国立音大講師)ほか			
18:00	懇親会 1号館学生食堂			

A = M.L教育 B = 生涯教育 C = アンサンブル D = ミュージカル・オペラ E = 創作

F = 歴史・その他 G = 将来性 H = 教育

Rm-1 = 2号館ML教室 Rm-2 = 6号館302号室 Rm-3 = 6号館304号室 Rm-4 = 6号館大講義室

あいさつ 吉田泰輔代表

基調講演 和智正忠

あいさつ



高野紀子 (国立音楽大学学長)

日本電子キーボード学会第2回目全国大会開催おめでとうございます。前もってプログラムで基調講演に続いて8分野にわたって23の発表が予定されているのを拝見し、そのテーマが実に多岐にわたっていることに驚いた。エレクトロニックは今の社会、教育、文化、すべてのジャンルに欠かせないものかと思うが、この学会のテーマがそのうちの非常に多くの部分をカヴァーしているということを実感した。今後エレクトロニックの世界がどう展開していくのかは計り知れないが、現状をこれらのテーマの中から知ることができた。また、発表のレジュメに記されている現状やこれまでの経験は、今後の社会や教育のあり方を考える大きな材料となる。そのような、未来に向けてのステップとなる学会を本学で開いていただけることは、光栄であり、喜ばしく、私たちも多くを学びたいと考えている。今日一日が皆様方にとって有意義で、十分お話し合いの場を展開されて終えて頂ければ嬉しい。



吉田泰輔 (日本電子キーボード学会代表幹事)

設立準備大会から数えると3度目の大会を開催できたことを、皆様方と主にお喜び申し上げたい。発足以来ある程度の時間が流れ、学会として外枠の形は何とか整ってきたが、まだまだひとつひとつ検証し、手直しが必要な段階である。また、会員の数を増やしていかなければ、議論が堂々巡りすることもあり得る。今回は幸い研究発表が前回よりかなり増え、そうした面で充実したことを第2回大会の良い材料として受け止めながら、さらなる会員の増加を皆様にもご協力お願い申し上げたい。

総 会

1. 開会の辞
2. 議長選出・・・吉田泰輔代表幹事を選出
3. 報 告
 - 1) 2005 年度下半期～2006 年度上半期活動報告
 - 2) 2006 年度上半期会計報告・同監査報告・・・拍手承認
 - 3) その他・・・特になし
4. 協 議
 - 1) 2006～2007 年度役員体制について・・・選挙結果拍手承認、詳細はホームページ
 - 2) 日本電子キーボード学会会則(案)について・・・改正なし、省略
 - 3) 編集委員会規程(案)について・・・内容は昨年と同じものを正式に拍手承認、
 - 4) 投稿規程(案)について・・・一部改訂(項目の追加)を拍手承認
 - 5) 2007 年度事業計画(案)について・・・拍手承認
 - 6) 第3 回全国大会開催候補地について・・・東京学芸大学と交渉中
 - 7) その他・・・特になし
5. 閉会の辞

基調講演

電子キーボードの未来を考える

和智正忠（東京医科歯科大学大学院包括病理学分野）

かつて企業で電子楽器研究開発に長年従事し、現在は東京医科歯科大学の博士課程で音楽による健康増進に関して研究中の和智正忠氏の講演は、芸術的営みのみならず、祭祀、コミュニケーション、素朴な自己表現、癒しのための音楽的行動等も含む広い意味での音楽と人間の係わり合いの中に電子キーボードを位置づけようとするもの。

講演前半では、人間と音楽の歴史を有史以前から紐解き、さらに電子キーボードの歴史を概観した上でその長所と短所を整理して、「キーボードというインターフェイスで多彩な機能を実現することと、リアルタイムに独自で繊細な表現をすることを両立しようとする」と、人間の能力を超えてしまう。電子キーボードは多機能ではあるが、繊細なリアルタイムの表現は苦手だ。また、電子キーボードは“できないこと”をできる限り取り除いてきたために、音色だけでなく表現としての独自性をもつことが難しいのだが、それこそが電子キーボードの独自性だとも考えられる」と結論付けた。この種の問題についてはこれまでもさまざまな議論があり、今後も深めるべき事柄が多く残されてはいるが、和智氏はそれ以上この問題に深入りせず、より具体的な後半の議論に入った。そして、本題はむしろこの後半であったと言ってよいだろう。

後半では、前半で述べた電子キーボードの長所と短所を踏まえて、ステージで電子キーボードを生かすために必要な事柄と、それ以外の場で電子キーボードを生かすあり方が語られた。

ステージで使おうとした場合、電子楽器の音が嫌われることも多い。氏は「人間の聴き慣れた音への志向性」に加えて「デジタル化の過程で削られた雑音や揺らぎの要素も、人間に影響を与えていた」という仮説を検証することが今後の電子キーボード発展に有益では、と指摘した。さらに、氏はホールにおけるスピーカーの問題にも触れた。電子楽器は必ずスピーカーを通して聴衆に音を伝えることになるが、スピーカーから出される音の進み方は、アコースティック楽器のそれとは全く異なっており、豊かな響きを生み出すにはスピーカーの特性を熟知した上で工夫が必要だ。今後も実践を通してノウハウを積み重ねることが必要な分野であると言えよう。

最後に、ステージ以外の場面で電子キーボードを生かすあり方として、氏は精神神経免疫学的見地から見た可能性を、実践例のビデオ上映も交えて紹介した。恐らく氏が目下主力を注いで研究しているテーマである。音楽が心と身体に何かしらの影響を及ぼす、ということは、昔から言われており、私たちも日常生活の中で直感的に認識している。このことに精神神経免疫学という分野から科学的な裏づけを与えて、人間の心身の状態を良好に保つために、音楽を積極的に取り入れようとするのが、**Recreational Music-making(RMM)**という活動である。これは誰でも参加できる双方向の音楽環境を提供するもので、この音楽環境を支えるものとして、氏は電子キーボードが非常に適切である、としている。こうした場面における電子キーボードは、“コミュニケーションメディアとしての音楽”を鮮明に意識化するものだ。現代は多くの情報が所構わず飛び交う IT 時代である一方、人々の孤立化が進んでもいる。この世の中で、コミュニケーションとしての音楽を前面に打ち出す **Music-making** が果たしうる役割は大いに期待されて良い。さらに、今後学際的な研究によって **RMM** を意識した電子キーボードのためのプロトコルやコンテンツを開発する流れの中で、電子キーボードの人間にとっての新たな意味を考えることができるのではないか、という展望で講演は締めくくられた。（文責・森松慶子）

A-①『保育所保育士・幼稚園教諭養成課程における ML による初見奏の指導』

田中英夫 (立正大学)

この発表では、保育所保育士・幼稚園教諭の資格取得に関連した専門科目における ML 活用の実際と展望が述べられた。就職試験において課せられる、当日指定のピアノの初見奏対策としてのみならず、読譜力や演奏への集中力を養う点で有効だという観点から実践しているという「初見奏の指導」について興味深い報告がなされた。一つには、ピアノの配置に工夫をし、机間巡視を可能にしていること。一つには、全員分用意された初見奏の楽譜を与えられた予見時間の中で読み取る「間(ま)」を設け、音楽の構成や和声に着目しながら演奏の見通しを持たせようとしていること。さらに、ピアノの傍らにキーボードと同じ高さのテーブルをしつらえたことで学習を進める上でメリットが窺えた、などの点である。今後は、ピアノによる子どもの歌の弾き歌いのメソッドを初見奏の教材と併せて開発・体系化していきたいとの将来の展望で発表が締めくくられた。

A-② ML 授業に MIDI 演奏データを活用する試み ―ネットワークと FD を利用する―

小倉隆一郎 (文教大学)

ここでは、ML におけるピアノ指導で模範演奏を提示し、正しい読譜や適切なリズム・テンポを示すことで練習効果をあげることを主眼とした実践の中で、3種類のメディアを活用したことに対する学生の利用実態をもとに検証・考察した内容が発表された。

3種類のメディアとは、①MIDI データを納めた FD、②MIDI データを公開するためのホームページ、③携帯電話を介した音楽配信サービスのことであるが、演奏データはいずれも小倉氏のリアルタイムレコーディングによるものである。特に初心者に対するレッスン・サポートの一方策として構築されたシステムであるが、今年度初頭からの短期間の試行とは言え、調査結果から正しい読譜による適切な演奏ができるようになったという学生の反応などから所期の目的の多くは達成されたように見受けられる。また、学生がそれぞれに持つハード面の環境に応じて、データの試聴を可能にしているという面で、これからの活用にますます期待が持てる研究であると思われた。

A-③「キーボードハーモニー」におけるコンピュータの活用

脇山 純 (平成音楽大学)

学生自身が自分の内に持つ「サウンド」を具体的な音で表現できるようになることこそ重要だ、とする基本的な考えに立ち、「テクニックではなく、耳とセンスで弾く」ことができるようになることをねらった実践について発表がなされた。特に、コンピュータの機能を活かして ML での学習を補完するという観点から、いくつかのアプリケーションの紹介とその活用事例が示された。音楽ソフトのさまざまな機能及びそれを活用することによる学習の可能性などが紹介された。特に、抽象的になりがちな音楽表現にかかわる学習をより具体的で把握しやすいものとし、『音楽的センスと理論を結びつける能力の向上に貢献したい。それにより、モノクロの墨絵の中にも豊かな色彩を見いだせるようなセンスを身につけていけるであろう』、という主張が印象的な発表であった。

C-① 電子オルガンによる協奏曲のピアノ教育における有効性

海津幸子 (昭和音楽大学・洗足学園音楽大学)・藤井祥子 (サチコ・ミュージック)

ピアノ学習においてのアンサンブルが重要視されてきた昨今であるが、その難易度を①ピアノ連弾②ピアノ協奏曲③ピアノ・トリオなどの室内楽と位置づけ、「持続音による和声進行のエネルギー変化を感じられる」「音質を聞き分けながらフレーズのやりとりができる」利点などから、電子オルガンによるオーケストラの代用の有効性を発表。全日本ピアノ指導者協会の協奏曲部門における電子オルガン伴奏の数多くの体験から、音楽大学等の高等教育のみならず、ピアノ学習初期段階での導入の意義を示す事例はなるほどと思わせた。そのための委嘱作品や編曲なども行われ、徐々に作品も増えてきているという。今後、電子オルガンによってピアノ協奏曲によるピアノ学習の機会が増すことを期待させる発表であった。

C-② ハイブリッド・オーケストラについての一考察～オペラにおける現状と課題を探る～

阿方 俊 (昭和音楽大学)

1986年から電子オルガンがどのようにクラシック音楽に貢献できるか、というテーマで活動を展開されている氏ならではの、電子オルガンとアコースティック楽器による異種混合のオーケストラのスタイル＝ハイブリッド・オーケストラの歴史的な経過がオペラにおける活動に絞った例で示された。それらは、いろいろな時代の作品の様式、楽器の組み合わせなど、多様なシチュエーションに対応しており、改めて電子オルガンがオーケストラの役割を分担できうる能力があること、各演奏が将来の活躍を期待されて評価を受けてきたことを実証した。しかしながら一部の電子オルガンへの偏見などから、今日においてなお日常化していないか、ということについての意見も寄せられ、この分野の音楽的な研究もさることながら社会的な認知と需要の拡大に対しての展望も大いに待たれるところであろう。

C-③ 東邦音楽大学における電子オルガン伴奏によるピアノコンチェルト

～2・3台の電子オルガンに使っての試み～

桑原 巖 (東邦音楽大学)

東邦音楽学校(専門学校)で平成9～14年度に行われていた「舞台芸術演奏科」での実績を元に、平成17年度より短期大学で電子オルガンアンサンブルの演習(ピアノ科の学生の履修が多い)が行われていること、在学生や卒業生の有志によるアンサンブルのグループを指導してコンサートを企画・運営している事例を紹介された。スコアリーディング演奏による他のアコースティック楽器との競演(ピアノ、声楽～オペラ、ハイブリッドオーケストラ等)をしてきているが、メンバーがピアノ出身であることや、全日本ピアノ指導者協会でのピアノコンチェルトでの電子オルガン伴奏の展開を踏まえ、ピアノコンチェルトでの活動をより推進したい意欲が語られた。ピアノ奏者にとっても、若手の指揮者にとっても貴重な体験となる効用も見逃せない。一方、電子オルガンが認知されない現状、メンバーの実力向上など、根気強く取り組むべき課題も明確化された。

写真 桑原

E-① 2台の電子オルガンによる「R.Strauss のオーケストラリート」

山咲史枝 (国立音楽大学付属高等学校)

山咲氏は電子オルガンを用いた歌曲演奏というジャンルに早くから積極的なアプローチを試みている。本発表では今年9月、府中で行われた氏のリサイタルにおけるリヒャルト・シュトラウスの「ブレンターノの詩による6つの歌曲」を題材に、そこに電子オルガンがいかに貢献できるかということに照準がしぼられていた。氏が示したのは、時間の不足もあってか、虫の鳴き声や自然現象など効果音についてのものがほとんどだったが、そもそも音楽享受にとって、一度作曲者が抽象化したものを再び具象に戻して分かりやすくすることは、作品の意図に忠実と言えるのかどうか、一考の余地はある。作曲の本質的な構築性に対して電子オルガンがいかに貢献できるのか、今回はそんなことについてもうかがいたいものである。

E-② 電子オルガンのための作品について～自作自演から見えてくるもの～

福地奈津子 (日本音楽舞踏会議)

電子オルガンのあまりにも多様な機能は演奏家も作曲家も困惑させがちだが、自作自演をする福地氏にはそれが無い。これは明らかにメリットであると思えるが、意外な盲点もある。作曲者が自作自演したからといって、演奏が面白くなるわけではないからだ。なるほど、演奏家は自分の作品を演奏するわけではないから、演奏行為に対する責任感が作品の深い読みにも繋がるのかもしれない。ただし、面白ければ良い、という傾向に走らなければよいとも願う。電子オルガンの様々な機能に振り回されてしまう危険性についても言及されていたが、この楽器の長所も短所も理解されている福地氏が、それこそ自作自演もままならない人々に強く警鐘を鳴らし続けて欲しいのである。

写真 福地奈津子

E-③ 電子オルガンの歴史的考察(2)～音と音楽と周囲との関わり～

金銅英二 (松本歯科大学大学院)

金銅氏は本学会の学会誌でオルガンの歴史について詳細な論文を発表され、もはや愛好家の域をはるかに超え出ている感がある。電子オルガンの技術的発達、皮肉にも自らの個性を希薄にし、電子ピアノやシンセサイザーなど他の電子楽器に社会的地位を奪われつつある。今後この楽器はどうなるのか。氏はこの点に関して強い危機感を隠さない。発表の最後にピアホール「ミュンヘン」で奏でられる電子オルガンの演奏録音が披露されたが、旧式の楽器を使っているにもかかわらず、いや、それだからこそであろうか、心の琴線に触れる懐かしい響きが聴講者を癒した。望月さんという名奏者によっているからでもあろうが、少なくともこうした温もりのある音を今の電子オルガンは失っているのである。

写真 金銅英二

H-① 音楽教育と電子キーボードの音色について

初山正博 (世田谷区立明正小学校教諭)

教育の課題である『自己肯定感を育てる』と『人と積極的に関わろうとする力を育てる』の2点は、まさに器楽合奏を経験させることにより、個々の個性を生かし、楽器と個人の力に応じて集団で深まりをお互い感じることができるという、大きな効果をもたらす。

小学校使用楽器の範囲では、響きや厚みがなく、それに比べ、電子キーボードを活用した合奏は、多彩な音色により、豊かな表現を自身が感じ、演奏できる。映像からも、子どもたちの自信に満ちた真剣にとりくむ姿が感じられた。過去自分たちも経験した、ソプラノリコーダーや鍵盤ハーモニカやアコーディオンといったリード楽器に、発表者は電子キーボードによる弦楽器の音色を加えることで厚みのある、まさにオーケストラを体験させている。さらに、音のバランスを考えた先生独自の編曲も、子どもたちの音楽する喜びを更に、大きくしているだろう。しかし、シンセサイザーのサンプリングの比較などを聴いて、アンサンブルするには、融合できない浮いた音など、あらためて、違和感のない心地良い音を、提供するには、研究が更に必要であり、期待せずにはいられない。今後は目が離せない分野である。

H-② 『奏者の身体性を反映した電子オルガンアレンジ～幼い奏者の息遣いかき消さないために～』

森松慶子 (音楽ライター)

この発表は、是非、電子オルガン指導者にこのテーマと研究発表を提示し、音楽教育は幼児期にこそ、感性に働きかける重要な教育である、と論じたい内容であった。

幼な子が純真な気持ちのままにシンプルに演奏する映像と、技を競い合ったりあたかも指導者のアレンジ力を見せ付けるような音に溢れすぎた世界との比較に、音として聞こえてくる成果を急ぐ指導による演奏からは感じる事の出来ない幼な子の繊細な表現が、美しく感じられた。電子オルガンを使用する指導は、余りにも多機能や多彩な音色に頼りきり、また、指導者の過保護とも言える「工夫」が、幼い心の中で芽生えた創造性を壊す結果になる現状が多々見受けられることを空しく感じた。以前から発表者は、一貫して電子オルガンを演奏する際の身体性を研究課題としてきた。奏者自身の表現をどこまでも受け入れ、その素材の素晴らしさを生かしてあげる教育。一番忘れてはならない原点である。

E-③ 「バベルの塔—電子オルガンのための」を作曲して～電子オルガンらしさとは～

三宅康弘 (洗足学園音楽大学)

昨今、電子オルガンのための～委嘱作品も数多く発表される中、他の研究会での、作曲家のためのエレクトーンマニュアルなど興味深い展開に関心を持ちながらも、ご自身が作曲された作品を分析し、新たな斬新な視点を発表されたものであった。電子オルガン学習者は最終的にどこに行くかという疑問を持ちつつ、学び、研究してこられた。

中でも自由な発想であり、新たな表現の可能性が広がる2点も見逃せない。スピーカーは、拡声だけに捉われず、メガフォンスピーカーをつなぎ替え、音を歪ませて発することにより、現物を聴くことのできない現在において、蓄音機で聴いているかのような不思議な音を聴いた。また、リード音にハンカチを使い、鍵盤を打鍵状態とし、保持音に使うなど、新鮮な演奏であった。音楽史上の様々な編成の曲を引用しコラージュの音楽(現代の作曲技法)で書くというアイディアで、無限大の自由に対する音楽的制約を自ら課した「電子オルガンらしさ」追求する、説得力ある発表である。

B-① 生涯教育のキーボード指導

影山建樹 (清見潟大学塾)

影山氏は、静岡県の旧清水市が設定した公設民営の生涯学習機関、清見潟大学塾における電子キーボードの指導を平成7年から始め、今年で11年目となった。本発表は生涯教育の一環として行なっているこの電子キーボード指導の実践報告である。受講理由はクラシック音楽を勉強したいという《教養型》、若い時期に触ったことのある鍵盤楽器に再挑戦したいという《技能型》など多岐にわたっている。指導方針がユニークで、講師は教師ではなく、受講者の望みが達成できるように援助するものであり、基礎をしっかりと習得することにこだわらない。講座に通うこと自体が楽しみとなるように配慮して、誉め、励まし、失敗も受け入れる。曲の表現に最も必要な技能をつききりでトレーニングし、多くは要求しないとの事である。終わりに、楽器に関して、操作が容易で故障が少なく、お年寄りを意識したプリセット・リズムがほしいなど、メーカーへの要望が述べられた。

B-② 60歳から始めるキーボード…生涯教育現場からの提言

小沢真弓 (市川市社会教育指導員)

2007年からいわゆる団塊の世代が悠々自適生活に入り、中高年になってから楽器を習い始める人が増大していくであろうといわれている。高齢者は幼少期の人間が学び始めるケースとは異なり、完成度を高く求めればその道は長く険しいことに気づき、挫折していくことも多い。小沢氏は公民館における指導を振り返って、「私はこれまで『ピアノ』を指導している」と思っていたが、一部の『電子キーボードを持っている生徒』に『ピアノの弾き方』を強要していたのではないかと自問するようになってきた。」と述べた。生涯教育としてキーボードを指導しようとするとき、楽器の機能をシンプルに「全国统一」することが望ましい。また、成人になってから鍵盤楽器を始める人は、音符よりも指番号でメロディを捉える傾向が強いため、目指す音をすばやく弾けるように「パーソナル指番号」を含む高齢者に最適な教材・指導書を早急に研究すべきであるとの提言が述べられた。

B-③ 電子キーボードの活用による音楽の学習の可能性

仁田悦朗 (i-moa 音楽教育研究所)

仁田氏は、「生涯学習時代」における教科「音楽科」の在り方について考えるとき、電子キーボードの果たす役割はすこぶる大きいものがある、と述べている。電子キーボードの諸特性は、学習者に様々なメリットをもたらすが、その一例として、豊富な音色群をもつ故、アコースティックな楽器がそれぞれに持つ固有の奏法を獲得する必要がないこと、他と干渉し合わず、自分の学習・表現活動に集中できること、Plan→Do→Seeのサイクルを一個人内で展開できることがあげられた。また、指導者の立場からは、①学習指導を「技術の指導」から「音楽への参加の呼びかけ」へと転換できる、②「つくる・ためす」などの創造的な学習を無理なく仕組むことができる、③個性を生かした「その子なりの学習」を仕組むことができる利点があるとの事である。そうした転換とより望ましい学習環境の構成が相まってこそ、学習者の主体的で創造的な取り組みを促す学習指導につながると期待できるのである。

研究発表 - II (15:00~16:30) Room - 2

司会・報告 海津幸子 (昭和音楽大学・洗足学園音楽大学)

D-① 250回を迎えたシリーズコンサート『公園通りの一夜』経過報告

川村 敬一 (東京シティオペラ協会)

東京シティオペラ協会の電子オルガンを伴奏楽器として使用したコンサートやオペラ公演の、創成期から今日に至るまでの経緯が報告された。

長年に渡る数多くの経験から、オペラ公演には勿論のこと、リヒャルト・シュトラウスの歌曲作品における電子オルガン伴奏の適合性が語られ、今までの公演がVTRで紹介された。

今後に向けて、電子オルガンの楽器としての欠点を理解した上で、それを長所と変えて行く使い方を考えていくべきだとの提案がなされ、また質の高い電子オルガン奏者の育成、音響技術者による臨場感ある音場の形成の必要性等、人的素材の重要性が説かれて報告が締めくくられた。

D-② くらしき作陽大学における電子オルガンによるミュージカルの試み

赤松 英彦 (くらしき作陽大学)

2002年から2006年にわたって行われたミュージカル公演での電子オルガンの活用例を、VTRを交えつつ解説、そこでの可能性と問題点が検証された。

本番まで短期間で仕上げねばならなかったが故の電子オルガン1台でという伴奏形態に始まり、オーケストラと電子オルガン、ピアノと電子オルガンという様々な伴奏形態での試みが紹介された。その中で、俳優の都合・ダンスやセリフとの関わりから、テンポ設定・調性の変更等流動的な面への対応の必要性、音響技術者の質でオーケストラやピアノと違和感ない音響空間の創造が可能であることが報告された。また、オーケストラ・ピット内での演奏の存在感の問題、スピーカー配置や音響技術の問題、その他俳優との打合せの在り方にも言及。

ミュージカル公演を支える電子オルガンの在り方と活用法への積極的な取り組みは、今後の活用にますます期待が持てることを感じさせてくれた。

D-③ 電子オルガンによる新作ミュージカルへ2台の電子オルガンを使うメリット

西山 淑子 (昭和音楽大学)

伊東市で公演された市民ミュージカルでの電子オルガンの活用例がVTRにて紹介された。

電子オルガンを2台使うことで、重なり合うフレーズの完結、多層にわたる個々のディナーミクの変化が可能となり、音楽的に自然な表現が実現すること、また、奏者の負担の軽減、リズム処理の簡素化等のメリットがあげられ、音楽面は勿論のこと、コスト面やスケジュール等のセッティングにも小回りがきくという利便性が述べられた。

電子オルガンの多様なジャンルへの対応力こそが、今後のミュージカルの現場に相応しいという将来性が感じられる発表となった。

G-① 電子オーケストラの使命～電子オルガンでオーケストラ作品を演奏する意味～

野口剛夫 (昭和音楽大学・JEO 音楽監督)

1999年からJEO (Japan Electronic Orchestra) を主宰、音楽監督をして有に22回ものコンサートをされているが、常にオーケストラ作品自体を見定めた選曲、電子オルガンと電子パーカッションによる電子オーケストラをあくまでもツールと考えるなどの構想の根幹が披露された。絶対音楽で見定めるといふ意味合いから手始めにブルックナーの作品を取り上げ、響きの均一性、人間離れした long tone、音域の拡充など電子音で成し得る利点を試した経緯や、音色的な工夫よりも、まずは composition を重視という姿勢は、電子オルガンで何でもできるという発想からの安易なアプローチに警鐘を鳴らすものである。最後に「電子オルガン基本法」と銘打たれた、電子オルガン奏者の教育についての、独自の理念が提案された。これを叩き台に、これから各方面の関係者の議論が展開していくことが期待される。

G-② 多様化時代と電子オルガンの指導～ドリマトーン、アトリエ、エレクトーン共存の試み～

前田栄子 (昭和音楽大学)

本来ソロ楽器として開発された電子オルガンのアンサンブル演奏による多様性を引き出すために、また、各企業の枠を越えた電子オルガンの可能性を試みるために、カワイ、ローランド、ヤマハの各電子オルガンが一つの舞台に並ぶコンサートを自主企画している事例が発表された。各社の製品の特徴を活かした選曲やアレンジで、生徒や聴衆に大変よい刺激となっていることや、他社の楽器に触れることで違う発想が生まれ、音色の探求に役立っていること等、興味深いものであった。なかなかステージ以外で各楽器を揃えることが困難なために3社の楽器によるアンサンブルが実現できない現実は電子オルガンの置かれている状況を端的に表しているといえる。しかしながら発表者の電子オルガン全般への飽くなき追求心は、音楽を志す者の初期の純真を思い出させ、その熱意こそが大人の事情を乗り越える起爆剤となりうるか、と反省もさせられた。

F-② マルチトラックアサインの実演及びその有用性について

小熊達弥 (サウンド・インターフェース)

「現代人の音楽視聴時間の9割以上が録音物によるものである以上、エレクトーンによる録音物の質を上げることはこの楽器や演奏家に対する評価向上の必須条件である」という主旨に基づいて小熊氏が提唱するのが、マルチトラックアサインである。エレクトーンは多種多様な音色・機能を駆使して多声的な音楽情報を扱うが、それらを一人の人間がソロ演奏の中で完璧にコントロールするのは本来無理で、録音物の質を下げる大きな要因となる。そこで、個々の音色を別々のトラックに振り分け、個別に音の立ち上がりや強弱などの変化を施すことが可能となるマルチトラックアサインが威力を発揮する。現在エレクトーンで演奏される音楽がソロ演奏表現の限界を超えている、という氏の認識はもっともで、それをカバーするこうした手法を洗練することは不可欠だ。と同時に、一人の人間が一台の楽器を演奏するに際しての過不足のない表現を追求する必要性も痛感させられた。

F-③ 電子オルガン音楽の社会認知に必要なことーコンサート活動を通しての可能性と課題ー

安井正規 (電子オルガン奏者)

安井氏は、国内外の様々な場で精力的に電子オルガン演奏を積み重ねた中から、一般の社会における電子オルガンの存在意義は、①電子楽器であること②ライブ演奏で強みを発揮すること③ポリフォニックな音楽表現が可能なこと④多段鍵盤を有すること、の4つが重なり合った「複合的な価値」にあるとする。楽器としてのアイデンティティや将来性に関して否定的に議論されることの少ない電子オルガンだが、音楽家や音楽家以外の多くの人々とともに現場を踏んできた経験から氏は、電子オルガンだからこそできることがある、という確かな手応えを感じており、その手応えこそは氏の次なるステップへの原動力となっていることが窺える発表であった。また、電子オルガンの可搬性やメーカー間の互換性についての提案、さらには、電子オルガンをめぐる音楽活動が販売促進やモデルチェンジを契機としたデモンストレーションに偏りすぎている、という問題提起もなされた。

G-③ 芸術創造の立場から見た電子オルガンの将来性

中島洋一 (国立音楽大学)

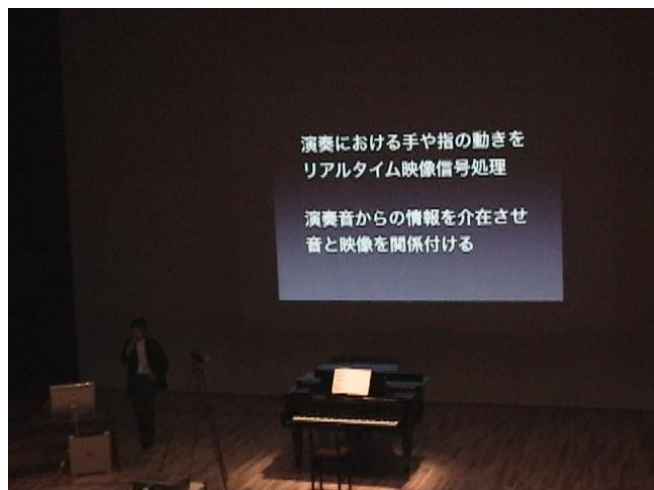
午前中の基調講演で和智正忠氏が「電子鍵盤楽器は多機能故に、リアルタイムでデリケートな表現をするのには向かない」と論じたのを引き合いに出しながら、中島氏は、まさにその多機能性の更なる拡大と、リアルタイムでデリケートな表現性の獲得を両立させることこそが、電子オルガンが今後生き残る要件である、と述べた。電子オルガンはより廉価な電子楽器に比べて音色作成機能が貧弱だ。また、MIDI規格に対応しているために例えばピッチの漸次的な変化が128段階の階段状になってしまい、真に滑らかな変化は望めない。一方MIDI非対応の古典的電子楽器であるオンド・マルトノは、微妙な表現性に関しては電子オルガンよりも自由度が高い。氏は、電子オルガンは以上の2点を技術的に十分克服できると語り、外部音源を電子オルガンで演奏する形で、それがいかなる表現を可能にするかを実際の音響で示して発表を締めくくった。

電子キーボード・デモンストレーション
マルチメディア芸術素材としてのキーボード演奏について
～キーボード演奏と電子技術の新たな関係性の模索～

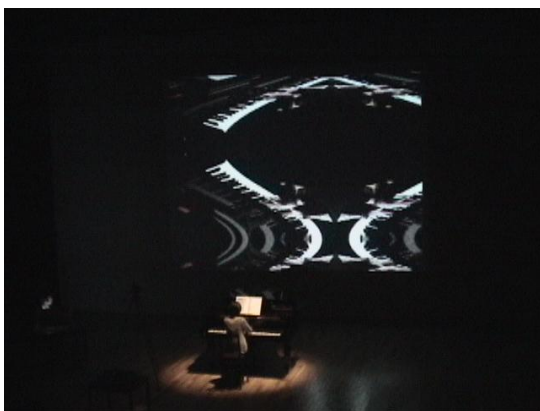
今井慎太郎 (国立音楽大学)



解説中の今井慎太郎講師



ステージ風景



ステージ風景



質疑応答

2006年～2007年度正会員・学生会員

赤石敏夫(赤石音楽研究所)、阿方 葵(竹早教員保育士養成所)、阿方 俊(昭和音楽大学)、赤塚博美(洗足学園音楽大学)、赤松英彦(くらしき作陽大学)、安藤恭子(鶯谷高等学校)、遠藤雅夫(日本現代音楽協会)、伊倉由紀子(昭和音楽大学)、出田敬三(平成音楽大学)、内山澄孝(国立音楽大学)、大串和久(兵庫短期大学)、生頼俊秀(昭和音楽大学)、小川 秀樹(広島音楽高等学校)、奥平純子(昭和音楽大学)、小倉隆一郎(文教大学)、小沢真弓(鬼高公民館)、海津幸子(昭和音大・洗足学園音大)、加賀誠二(NPO 法人さくら歌劇団)、影山建樹(清見潟大学塾)、梶 麻衣子(八王子市立長房小学校)、柏村 治(昭和音楽大学)、川村敬一(東京シテオペラ協会)、木村英寛(浜松学芸高等学校)、木村美智雄(ト一オ一楽器)、久保智美(オンドマルトノ奏者)、久米詔子(佐賀女子短大附属高校)、桑原 巖(東邦音楽大学)、見野康幸(昭和音楽大学)、小池純江(昭和音楽大学)、小熊達弥(サウンド・インターフェイス)、金銅英二(松本歯科大学)、佐田尾圭子(山口芸術短期大学)、佐藤美千枝(菅波楽器)、柴田 薫(昭和音楽大学)、清水徳子(平成音楽大学)、下八川共祐(昭和音楽大学)、陣内美紀子(平成音楽大学)、鈴木しおり(浅井学園大学)、須田マリ(竹早教員保育士養成所)、高島和義(高島武慶おふいす)、高田俊治(昭和音楽大学)、高萩保治(東京学芸大学名誉教授)、高橋 豊(電子オルガン奏者)、高橋由美子(浜松学芸高等学校)、田中久明子(ヤマハ音楽教育システム)、田中英夫(立正大学)、谷口弘子(竹早教員保育士養成所)、中地雅之(東京学芸大学)、常政芳子(YM 横浜湘南)、中島百合子(大垣女子短期大学)、中島洋一(国立音楽大学)、中村 誠(浜松学芸高等学校)、西山淑子(昭和音楽大学)、仁田悦朗(I-moa 音楽教育研究所)、野口 剛夫(昭和音楽大学)、初山正博(世田谷区名正小学校)、坂 利美(開進堂)、福田 裕子(広島文化短期大学)、福地 奈津子(日本音楽舞踊会議)、藤井祥子(ピアノ教育家)、古市 正子(浜松学芸高等学校)前田 栄子(昭和音楽大学)、松宮 敬(福岡女子短期大学)、水垣玲子(聖徳大学)、三宅 康弘(洗足学園音楽大学)、迎 晶子、森岡 葉(音楽ライター)、森崎貴敏(昭和音楽大学)、森 直樹(昭和音楽大学)、森松慶子(音楽ライター)、安井正規(電子オルガン奏者)、柳田孝義(文教大学)、藪 雅貴(厚木楽器)、山咲史枝(国立音大付属高等学校)、山中秀樹(山口市立小鯖小学校)、吉田泰輔(国立音楽大学)、脇山 純(平成音楽大学)、和智正忠(東京医科歯科大学)学生会員/加藤祐子(国立音楽大学)、坂本恵子(昭和音楽大学)、前木洋美(宇都宮大学)

会員申込み

下記申込書フォームにご記入の上、メール、ファックス、郵送でお送りください。

日本電子キーボード学会申込書	
氏 名：	_____ 専門分野： _____
所 属：	_____
住 所：	〒 _____
電話&ファックス：	Tel: _____ Fax: _____
メール・アドレス：	_____
*会員名簿への住所などの記載 (丸で囲む) ①する ②しない	
薦者名 (1名)：	_____ *推薦者は正会員に依頼
正会員に知り合いがない場合は、事務局へご相談ください。	

学 会 費：正会員 5,000 円 学生会員 2,500 円 団体会員 10,000 円
銀行口座：りそな銀行 新百合ヶ丘支店 普通預金 口座番号 1318267 「日本電子キーボード学会」
郵便振込：口座番号 00250-0-129916 「日本電子キーボード学会」

選挙結果と新幹事体制

1. 選挙結果

第2回全国大会まで日本電子キーボード学会設立実行委員会を中心とした運営体制は、今後、会則10条に基づいて行われた選挙結果に基づいた新幹事体制で行われます。以下、選挙結果です。10月21日、国立音楽大学本部練2F会議室で開票されました。

氏名	得票	順位	氏名	得票	順位	氏名	得票	順位
阿方 俊	56	1	海津 幸子	12	9	高田 俊治	7	16
吉田 泰輔	33	2	生頼 俊秀	11	10	中村 誠	6	18
下八川共祐	29	3	仁田 悦朗	11	10	西山 淑子	6	18
出田 敬三	25	4	柴田 薫	10	12	赤石 敏夫	5	20
森松 慶子	25	4	初山 正博	9	13	水垣 玲子	5	20
高萩 保治	23	6	柳田 孝義	9	13	森崎 貴敏	5	20
野口 剛夫	21	7	安藤 恭子	8	15	安井 正規	5	20
赤塚 博美	17	8	小熊 達弥	7	16			

2. 新幹事体制

以上の結果を鑑み、幹事会への出席の可能性や個人的事情などにより8名（阿方 俊、吉田泰輔、下八川共祐、出田敬三、野口剛夫、仁田悦郎、初山正博、柳田孝義）が決定されました。12月4日の第1回幹事会で代表に吉田泰輔が選出され、会則10条の第1および第2項に基づき副代表に下八川共祐、柳田孝義の2氏および幹事に中地雅夫、赤石敏夫の2氏が推薦され承認されました。

代表幹事 吉田泰輔（国立音楽大学）
副代表幹事 下八川共祐（昭和音楽大学）
柳田孝義（文教大学）
幹 事 赤石敏夫（赤石音楽研究所）
阿方 俊（昭和音楽大学）
出田敬三（平成音楽大学）
中地雅之（東京学芸大学）
仁田悦朗（I-moa 音楽教育研究所）
野口剛夫（昭和音楽大学）
初山正博（世田谷区立明正小学校）

3. 第3回全国大会組織委員会

第3回全国大会は、東京学芸大学で2007年10月6日（土）に予定されていますが、このための組織委員会が第1回幹事会で以下のメンバーに決定されました。

組織委員長 高萩保治（東京学芸大学名誉教授） 副組織委員長 中地雅之（東京学芸大学）
組織委員 阿方 俊（昭和音楽大学）、初山正博（世田谷区立明正小学校）
アドバイザー 内山澄孝（国立音楽大学）

事務局からのお知らせ

学会誌『電子キーボード音楽研究』No.2 投稿者募集

原稿の種別および字数：電子キーボードを用いた音楽の演奏、創作、教育等に関する①研究論文(20,000字以内)、②研究報告(10,000字以内)、③会員の活動報告(5,000字以内)、演奏会批評や書評(2,000字以内)、講習会報告、④会の内外の活動や情報についてのレポート
投稿者：原則として会員とする。ただし依頼原稿執筆者はこの限りでない。
*詳細に関しては、ホームページをご参照ください。

第3回全国大会(2007年10月6日 東京学芸大学) 研究発表者募集

内 容：電子キーボード(電子オルガン、電子ピアノ、シンセサイザーなどポータブルキーボード)に関する①表現、②教育、③理論などに関するもの
発表時間：30分(質疑応答を含む)
応募方法：発表題目および要旨を事務局に申し込む。*詳細は事務局にお問い合わせください。

ホームページ「掲示板」設置

この度 JEKS 会員専用の掲示板を設置いたしました。
通常サイトで使用している掲示板では、不特定多数の閲覧・記入を前提にしていますので、本学会に不要・無関係と思われる記入がなされる恐れやいたずらなどを目的とした書き込みがなされる恐れが予想されます。
そこで、ポータルサイト「goo」の「サークル」というサービスを利用し、会員のみを開かれ、一般には閉じた掲示板を設置し、その作業が完了いたしました。この掲示板を閲覧したり掲示板に記入をしたりするためには、各会員がそれぞれに任意に設定した「ID」と「パスワード」を入力し、掲示板にログインする必要があります。詳細、ホームページをご覧ください。

《後書き》

第2回全国大会では第1回大会の研究発表者が13名であったのに対して23名と増え、発表内容も多岐に渡り成功したといえますが、その反面、会員数が伸びていないため1会場あたりの聴講者数が少なかったという問題が浮上してきました。次なる課題として、第3回大会に向けて仲間を増やしていくことがあります。会員諸氏のエネルギーを会員募集に割いていただきたいと思います。この度、会員間の相互交流の場としてホームページ「掲示板」を設置しました。ご活用ください。担当は仁田悦朗幹事です。

本学会もはじめての役員選挙により、学会設立準備委員会から脱皮した正規の体制ができました。(阿方)